

# 幼児の恥および罪悪感に関連する表出・行動とその発達の連続性の検討 — 1年後の追跡調査—<sup>1</sup>

久 崎 孝 浩<sup>2</sup>

The examination of behavioral patterns relevant to shame and guilt and of developmental continuity of those in early childhood: A follow-up investigation after one year

Takahiro Hisazaki

## Abstract

It is known that after a mishap that 2-year-old children appeared to cause and in which they did damage to another person's object, a shame-relevant group of children who avoided him or her in the mishap was less likely to repair and confess his or her damage than a group of children who did not avoid. It is unclear, however, whether children who tried to fix the damage had a guilt-ridden motivation to repair for him or her. And it is not evident whether individual differences in behavioral tendency to shame and guilt are developmentally stable in early childhood, though it was reported that individual differences in proneness to shame and guilt were remarkably stable from middle childhood to early adulthood. Therefore, this research examined above two questions. In Study 1, 25- to 37-month-old children were led to happen to break an experimenter's doll, and their behaviors relevant to shame and guilt were observed. A group of children who fixed the doll with their gaze on the experimenter when the experimenter was present after the mishap was more likely to be quick to rivet their eyes on a nurse when the experimenter had been not present yet after the mishap and to show the broken doll to the experimenter after the mishap than a group of children who fixed the doll without their eyes on the experimenter or who did not fix it. This result suggested that not only repairing but also gazing at another person suffering a damage might be critical nonverbal indicator of guilt feeling. In Study 2, which was conducted one year after Study 1, thirteen of children who had participated in Study 1 were led to cause an experimenter's building of blocks to collapse, and then the relation between their behavioral variables in Study 1 and those in Study 2 was examined. The children who had tended to smile and show the broken doll to the experimenter in Study 1 was more likely to do the same in Study 2, but avoidant children in Study 1 did not tend to be avoidant in Study 2. This result indicated that not individual differences in shame-relevant avoidant behavioral pattern but those in guilt-relevant affiliated behavioral pattern could be stable for one year in early childhood.

Key words: shame, guilt, early childhood, gazing at a suffered person, developmental continuity

種々の情動経験の中でも、特に自己意識的情動は私たちの情動的な生活において中心的な役割を担っているかもしれない。自己意識的情動 (self-conscious emotion) とは、恥 (shame)、罪悪感 (guilt)、テレ (embarrassment)、誇り (pride) などの情動を指し、悲しみや恐れなどの基本的な情動 (basic emotion) とは一線を画す。すなわち自己意識的情動は、その生起において自己覚知 (self-awareness) や自己表象 (self-representation) を要するが、基本的な情動にはそれらを必ずしも要せず (Buss, 2001; Lewis, Sullivan, Stanger, & Weiss, 1989; Tangney & Dearing, 2002; Tracy & Robins, 2007)、また、そうした認知能力の発達なくしては自己意識的情動の出現はありえない (Lewis, 2000; Tracy & Robins, 2007) ということや、自己意識的情動は生存という目標達成 (attainment of survival goals) よりもある特定の社会的目標の達成 (attainment of social goals) を促進する機能を有している (Barrett, 1995; Tracy & Robins, 2007) ということからみても基本的な情動とは異なるのである。

情動は個体の生存と生殖 (reproduction) の確率を高めるために自然選択を通じて進化してきたと考えられるが、とりわけ、捕食者などによる直接的な生存危機から免れた人間社会においてはむしろ、自己のアイデンティティや地位を維持・増進させ、集団からの拒絶を回避するという複雑な社会的目標に常時関心を向けておくことがより重要であり、そうしたことが他者や他集団との調和的關係を通じて最終的に個人の生存確率を高めているかもしれない (遠藤, 1996; Keltner & Buswell, 1997; Tracy & Robins, 2007)。それゆえに、私たちはある社会的状況において基本的な情動以上に自己意識的情動を惹起し、その過程で、特定の社会的目標を維持するような反応を結果的に示したり (Barrett, 1995; Tangney & Dearing, 2002; Tracy & Robins, 2007)、またその状況によっては特定の自己意識的情動が生じうることを予期してあらかじめ状況や行動を選択・調整したりしているであろう (久崎, 2006; Hoffman, 2000; Tangney, Stuewig, & Mashek, 2007b)。こうして考えると、私たちの情動的な生活は想像以上に自己意識的情動によって占有されており、それがあまりにも過剰あるいは過少であれば私たちはそれによって苛められることも多々あるかもしれない。

## 恥と罪悪感

自己意識的情動の中でも、殊に恥と罪悪感はともにネガティブな自己評価 (self-evaluation) に関連しており (Lewis, 2000; Tangney & Dearing, 2002; Lagattuta & Thompson, 2007)、双方は類似した情動でありながらも近年、構造的または機能的に異なる情動として把促されるようになってきた。例えば、失敗を自らの“能力 (ability)” に帰属させる個人は恥を経験しやすいが、それを自らの“努力 (effort)” 不足のせいだと見なす個人は罪悪感を経験しやすいこと (Brown & Weiner, 1984; Tracy & Robins, 2006) や、自らの安定していて制御不可能な要素に原因を帰属 (internal, stable, and controllable attribution) させやすい個人は恥を経験しやすく、自らの安定しない制御可能な要素に原因を帰属させやすい個人は罪悪感を経験しやすいことが、これまでの研究で示されてきた (Tangney, Wagner, & Gramzow, 1992; Tracy & Robins, 2006)。こうした結果は、恥と罪悪感のいずれが生じるかは自己のどのような側面に対して自己評価を傾け

るかに依存することを示唆しうるものである。

またこれまでの研究で、恥がある種の失敗に対してそれを否定・隠蔽・回避しようとする行為傾向 (action tendency) を有するのに対して、罪悪感が失敗による他者への損害を自認・陳謝し取り消そうとする行為傾向に導くことが示されてきた (Tangney, Miller, Flicker, & Barlow, 1996; Wallbott & Scherer, 1995)。さらに、恥傾向は他者志向的な共感 (other-oriented empathy) と関連せず (Tangney & Dearing, 2002)、敵意あるいは他者非難の傾向と正の相関を示し (Bennet, Sullivan, & Lewis, 2005; Tangney & Dearing, 2002)、様々な心理的問題とも関連することが報告されている (Tangney, Stuewig, & Mashek, 2007a)。一方、罪悪感傾向は恥傾向とは対照的に、他者志向的な共感や怒りにおける建設的な反応と正の相関を示し、心理的問題と関連しないことが報告されている。こうしたことから、罪悪感には恥に比して社会的関係や自己自身に対し適応的に機能していることが窺える<sup>3</sup>。

### 恥と罪悪感の初期発達と個人差

恥は罪悪感よりも適応的機能という面で相対的に否定的であるとすれば、個人がいかに恥と罪悪感を発達させるかを探究すること、もっと言えば、恥傾向および罪悪感傾向はいつ頃形成され、それらはどのような生物学的特質や社会化によって変化あるいは安定していくのかを解明することはその個人の心理的健康を考える上で重要になってくる。さらには、恥と罪悪感の違いはそれらを生起させる出来事の質的違いにあまり依拠しないことが多く報告されており (Keltner & Buswell, 1996; Olthof, Schouten, Kuiper, Stegge, & Jennekens-Schinkel, 2000; Tracy & Robins, 2006)、恥と罪悪感はある同一の出来事に対して“同時生起 (co-occurrence)”する (Barrett, Zahn-Waxler, & Cole, 1993) のだとすれば、社会化過程をも含む、諸々の出来事に遭遇していく過程の中で恥と罪悪感のどちらを優位に経験するかによって、恥傾向と罪悪感傾向それぞれが異なった発達の経路を辿ることも考えられよう。すなわち、恥傾向と罪悪感傾向の発達を考えると、恥と罪悪感それぞれをどの程度経験しやすいかという個人“間”差だけでなく、個々人は恥と罪悪感のどちらを優位に経験しやすいかという個人“内”差も問題になってくるのである。

Lewis (1992) によれば、1歳半ば頃に成立する自己意識を通じて自他の関係を客体的に理解することによって社会的目標・基準を取り入れるようになると、2歳半ば頃に自己評価が可能になり、それに伴って恥や罪悪感がほぼ同時期に出現してくるという<sup>4</sup>。このことからすれば、恥や罪悪感それぞれの個人間差はそれらの出現時期である2歳半ば頃にすでに見受けられるであろう。ただ、そうした時期の恥と罪悪感の傾向に、先で述べた個人内差もすでに存在しているのであろうか。これについてBarrett et al. (1993) は興味深い結果を示している。生後24から36ヶ月の子どもに実験者の大切にしている人形を壊してしまったと思い込ませるよう仕組んだ場面で、子どもの反応を観察したところ、実験者に対する回避的行動 (視線回避や後ずさり) を多く示した子ども (avoider) は人形の修復や提示の潜時が長いのにに対して、回避的行動を殆ど示さなかった子どもは修復や提示行動の潜時が短い (こうした特徴からこれらの子どもはamenderと命名されている) ことが明らかになった。さらに、日常子どもがどの程度恥と罪悪感を経験しているかに関する親の報告に基づいて算出した、罪悪感得点から恥得点を引いた得点も含めて検討したところ、avoiderの子どもはamenderの子どもに比してその得点が有意に低かった。これらの結果から、2歳頃にはすでに、恥と罪悪感それぞれの傾向の個人間差だけでなく、恥対罪悪感の個人内差が生じていることが窺えるであろう<sup>5</sup>。なお、久崎 (2005) はBarrett et al. (1993) の方法に依拠し

て生後25から37ヶ月の子どもの様子を観察し、回避的行動（視線回避や後ずさり）以外の行動の潜時・頻度・持続時間を計測したデータを因子分析によって集約して、謝罪と修復の2傾向を見出している。この研究も、Barrett et al. (1993)と同様に、回避的行動を示した子どもはそうでない子どもに比して修復する傾向が低いことを示していた。

### 恥と罪悪感の非言語的表出・行動

確かに、こうした研究結果から、子どものavoider対amenderという行動傾向を恥対罪悪感の傾向に照らし合わせて考察していくことができるだろう。しかし、本論の脚注4でも述べたように、恥にはある表情に伴って頭と視線を下げるという特定の非言語的表出・行動が対応していることが確かめられている(Keltner, 1995; Keltner & Buswell, 1997)が、他方の、罪悪感に特異的な非言語的表出・行動あるいは生理的反応が確認されているわけではない(Tracy & Robins, 2007; Robins, Nofhle, & Tracy, 2007)。すなわち、常時、修復行動を示したからといってその個人が罪悪感を体験しているのか、あるいは、修復行動が罪悪感によって動機づけられるのかは定かではないのである。得てして、Barrett et al. (1993)や久崎(2005)の研究に参加した子どもたちのうち壊れた人形を修復していた子どもは、必ずしもその人形の持ち主である実験者に対して申し訳なく感じて壊れた人形を元どおりにしようとしたのではなく、場合によっては自らの失敗の証拠を隠そうとしていたかもしれない。罪悪感に関わる提示行動に関してはそれそのものが自らの失敗の証拠を他者に示そうとするものであるからその動機づけの側面を検討する必要はないと考えられるが、修復行動についてはその動機づけを検討する必要があるだろう。

### 研究1の目的

そこで、本研究の研究1では、修復行動のパターンの質的な差異を決定づける要素の一つとして子どもの視線の動きに着目し、修復行動が持続している最中に実験者に視線を向ける子どもと、修復の最中に実験者に全く視線を向けない子ども、修復行動を全く示さない子どもの3群に分けて、それぞれの行動特徴について検討した。なお、研究1で検討される参加者およびそのデータは久崎(2005)で提示されたものであることを了解されたい。

### 恥と罪悪感の発達の連続性

先では、2歳半ば頃の恥傾向と罪悪感傾向について触れたが、それらの傾向は2歳半ば以降どのように変化あるいは安定していくのであろうか。Tangney (Tangney, 1999; Tangney & Dearing, 2002)は子どもやその父母・祖父母に対して縦断的に、恥傾向と罪悪感傾向を質問紙で計測し、各世代の恥傾向と罪悪感傾向の発達の連続性を検討している。その結果、子どもの場合、10歳から18歳にかけて恥傾向と罪悪感傾向はともにかなり高い連続性を示し、その父母や祖父母においても恥傾向と罪悪感傾向は2年にわたって高い連続性を示した。しかしながら、特性としての恥と罪悪感が現れはじめる2歳半ば以降、それらの個人差は発達の連続性を示すのであろうか。例えば、2歳半ば頃に恥に関連した回避的行動を示しやすく、罪悪感に関連した修復や提示行動をあまり示さない子どもは、1年後でも同様の行動傾向を示し、さらに言語報告が可能な発達段階になっても質問紙等の回答を通じて、一貫して恥傾向の高さおよび罪悪感傾向の低さを示すのであろうか。あるいは、恥と罪悪感のそれぞれの個人間差および恥対罪悪感の個人内差は2歳半ば以降、発達とともに変動していくのであろうか<sup>6</sup>。Barrett et al. (1993)の研究成果が報告され

て以来、こうした疑問に確答を与える研究は未だ見当たらない。

## 研究2の目的

そこで、本研究の研究2では、研究1の参加者のうち、二度目の調査参加への協力に承諾いただいた参加者（参加者は子どもで幼いため、当然のことながら参加者の保護者や保育園から承諾を得ている）に、1年後、研究1と同様の、実験者の大切な物を子ども自身が壊したかのように思い込ませる場면을提示して、その場面での子どもの、恥や罪悪感に関連した表出・行動を観察した。そして、研究1と研究2の表出・行動データをもとに、1年間でいかに変動あるいは連続しているのかを検討した。

# 研究 1

## 方 法

**参加者** 私立ならびに公立の保育園に通園する子ども38名（平均月齢31.6ヶ月、月齢レンジ25～37ヶ月、男児17名、女児21名）。

**調査時期** 1999年7～9月。

**手続き** 参加者の通園している保育園に調査の趣旨を説明し、まず調査への協力に対する了承を得た。その後、参加者を担当している保育士に調査内容と手続きを書面で伝え、参加者の保護者にはその保育士を通じて調査内容と手続きについて書面にて伝えた。そして、保育士からは調査への協力の了承を直接得て、保育士には調査手続きを再度説明し、保護者からは電話を通じて調査に協力するか否かの確認を行った。したがって、参加者は、そうした経緯を経て了解を得ることのできた保護者の子どもであった。

また、本研究の調査では調査者の大切にしている人形が壊れるという場면을参加者である子どもに提示するため、調査者と子どものある程度の親密な関係を築くこと、また調査者が人形を普段から大切にしていることを子どもに知らしめることが重要になる。そこで、調査開始の4日前から参加者の所属するクラスで子どもとともに終日過ごした。

**調査場面** 実験的観察による調査は、参加者である子どもが一日の大半を過ごし慣れ親しんでいるクラスルームで、子どもがクラスルームに居ない自由遊び時間に行われた。調査場面は、以下に示す場面の流れのとおり、Barrett et al. (1993) で用いられた場면을参考にし、調査者の人形を自分自身が壊したかのように子どもが思い込むよう仕組まれたものであった。なお、参加者の子どものうち2名の男児は、調査場面において調査者の人形に殆ど興味を示さなかったため、その2名を除いた36名（男児15名、女児21名）が以後の分析の対象となった。

(a)保育士が子どもをクラスルームに連れて行き、子どもは保育士と二人で自由に遊ぶ。(b)その後しばらくして、調査者が足が体から取れる人形を持ってクラスルームに入って保育士と入れ替わり（保育士はクラスルーム内の特定場所に座り、子どもが見渡せる範囲内で帳簿付け等の保育士の仕事をやる）、その人形を様々に動かし楽しく遊んでいる様子を1分程度子どもに示す。そして、調査者は子どもにその人形と遊ぶよう伝え十分に促した後、退室する。(c)子どもは、調査者が居ない間にその人形の足を外してしまう。保育士は人形の足が外れた時点から場面終了まで、子どもが泣いたり、援助を求めに来たりしない限りにおいては、子どもに対して直接声をかけた

り、慰めたり、援助をしたりしないよう教示を受けている。(d)人形の足が外れた時点から2分後に、調査者は子どものいるクラスルームに入室し、何も言わずにその人形を1分間じっと見つめ続け、それで場面は終了となる。

**倫理的配慮** 調査場面は、子どもの個人差がどうあれ、基本的にネガティブな情動を子どもに喚起させるものである。それが少しでもその後の子どもの心身に悪影響を及ぼしてはならないと考えられ、次のような最大限の配慮・ケアを行った。第一に、クラスルームにクラス担任の保育士を配置し、場面の進行中に子どもが何らかの危険な行為や事故を起したりすることがないように未然に注意を配り、また、クラスルームに一人でいることによる強い不安や人形が壊れたことによる激しい心理的動揺に咄嗟に対処できるようにした。第二に、調査場面終了直後に、どの子どもに対しても、ディブリーフィングとして初めから人形の足が外れるようになっていたことを説明し、子どもの目前で人形を修復して元の状態に戻し、子どもの緊張・不安・動揺が治まり明らかに喜びや笑顔が表れるまで、子どもを抱っこしたり、ともに遊んだり、クラスルームを探索したりして、十分な心理的ケアを施した。

**行動評定** 評定の対象となる行動は久崎(2005)とほぼ同様である。また、基本的には調査者に対する恥や罪悪感に関連した行動を評定・計測するため、上記調査場面(d)における、特に調査者に関わる行動が評定対象になるが、本研究では、場面(d)の前の場面(c)の行動も含めて検討するため、場面(c)と(d)のどちらにも適用可能な行動カテゴリーとその定義に若干改め、場面(c)で観察されうる保育士に対する提示行動や注視行動も評定対象として行動カテゴリーに含めた。なお、以下に、評定対象の行動カテゴリーとその定義を示す。

- (1) 修復行動 外れた足を自ら人形につけようとする。また、足を人形につけるよう保育士に要求する。
- (2) 調査者への提示行動 外れた足や人形を調査者に見せる。また、“アシトレタ！”などと調査者に告げる。
- (3) 調査者に対する視線回避 調査者を見た直後に、子どもにとって無意味な対象(たとえば、天井、窓の外、玩具など)のある方向を見る。
- (4) 調査者に対する身体的回避 実験者の方向を見ながら後ずさりする。また、身体が静止・硬直する。
- (5) 調査者への注視 調査者の顔を注視する(ただし、調査者が入室したときにはじめて調査者を注視する行為は含まれない)。
- (6) 微笑み 頬の筋肉あるいは口角が上に動く。
- (7) 保育士への提示行動 外れた足や人形を保育士に見せる。また、“アシトレタ！”などと保育士に告げる。
- (8) 保育士に対する視線回避 保育士を見た直後に、子どもにとって無意味な対象(たとえば、天井、窓の外、玩具など)のある方向を見る。
- (9) 保育士への注視 保育士の顔を注視する。

**行動変数とその信頼性** 場面(c)においては(1)修復行動、(7)保育士への提示行動、(9)保育士への注視それぞれの潜時、頻度、持続時間を計測した((6)微笑みや(8)保育士に対する視線回避は観察される可能性があったが、実際には殆どの子どもに観察されず、場面(c)での行動評定の対象外とした)。場面(d)においては子どもの調査者に対する行動特徴を把握することが肝要となるため、(7)保育士への提示行動、(8)保育士に対する視線回避、(9)保育士への注視を除く(1)から

(6)の行動それぞれの潜時、頻度、持続時間を計測した。なお、潜時の計測については、場面(c)では人形の足が外れた時点から計測開始とし、特定の行動が場面(c)の間で全く見られない場合には計測開始から場面(d)に切り替わるまでの時間(120秒前後)をその潜時とした。また、場面(d)の潜時については、調査者が入室して子どもが調査者に注意を向けた時点から計測開始とし、特定の行動が場面(c)の間で全く見られない場合には計測開始から場面(d)終了までの時間(60秒前後)をその潜時とした。

分析対象の子ども36名中9名(全体の25%)のデータについて、別の評定者1名(心理学専攻の大学院生)にも場面(c)や(d)における行動の潜時、頻度、持続時間を計測してもらい、信頼性の検討を行った。まず、場面(c)の(1)修復行動、(7)保育士への提示行動、(9)保育士への注視それぞれの潜時、頻度、持続時間といった量的変数については評定者間でのPearsonの相関係数を算出し、その結果、(1)修復行動の頻度( $r = .45$ )、(7)保育士への提示行動の頻度( $r = .53$ )、(9)保育士への注視の持続時間( $r = .59$ )以外は、高い信頼性を得た( $r = .79 \sim .87$ )。また、場面(d)における(1)から(6)の行動それぞれの潜時、頻度、持続時間について評定者間での相関係数を算出したところ、(1)修復行動の頻度( $r = .55$ )、(2)調査者への提示行動の頻度( $r = .50$ )、(3)調査者に対する視線回避の持続時間( $r = .38$ )、(5)調査者への注視の持続時間( $r = .56$ )以外は、高い信頼性が見られた( $r = .82 \sim .89$ )。もう一人の評定者との話し合いにより、修復行動や提示行動の頻度の信頼性が低かったのはそれら行動の終わりを判断しにくいことに起因しており、また注視や視線回避の持続時間の信頼性が低かったのは注視の焦点の所在を画像上で特定しにくいことに起因していると考えられた。こうして以後、高い信頼性が認められた行動変数を分析の対象とする。

Table 1 場面(c)における3群の各行動変数の平均値(SD)

	修復の 潜時	修復の 持続時間	提示の 潜時 (保育士)	提示の 持続時間 (保育士)	注視の 潜時 (保育士)	注視の 頻度 (保育士)
修復なし群	34.77 (37.07)	34.91 (33.82)	120.71 (65.41)	.00 (.00)	51.21 (56.17)	2.73 (3.73)
修復－視線群	23.76 (44.49)	72.57 (45.65)	116.63 (36.42)	.73 (2.08)	97.00 (59.90)	2.11 (3.64)
修復＋視線群	11.92 (14.86)	43.66 (29.97)	83.26 (63.39)	9.10 (16.68)	35.00 (40.80)	4.90 (4.68)

※上記の潜時と持続時間の単位は秒、頻度は回数である。

Table 2 場面(d)における3群の各行動変数の平均値(SD)

	提示の 潜時 (調査者)	提示の 持続時間 (調査者)	視線回避 の潜時 (調査者)	視線回避 の頻度 (調査者)	身体回避 の潜時 (調査者)	身体回避 の頻度 (調査者)	身体回避の 持続時間 (調査者)	微笑の 潜時	微笑の 頻度	微笑の 持続時間
修復なし群	54.88 (25.84)	4.00 (9.13)	46.63 (31.44)	1.13 (1.64)	58.88 (21.64)	.38 (.74)	1.50 (2.98)	58.75 (29.09)	.50 (1.07)	2.13 (3.36)
修復－視線群	47.63 (28.63)	2.00 (3.55)	50.13 (25.41)	.63 (.92)	58.38 (23.24)	.25 (.71)	1.50 (4.24)	60.75 (7.96)	.13 (.35)	.50 (1.41)
修復＋視線群	25.10 (29.20)	4.35 (4.16)	46.80 (25.26)	.70 (1.13)	59.30 (12.55)	.00 (.00)	.00 (.00)	50.4 (28.74)	.70 (1.26)	2.35 (4.39)

※上記の潜時と持続時間の単位は秒、頻度は回数である。

## 結 果

研究1は、場面(d)において修復行動が持続している最中に実験者に視線を向ける子ども(修復+視線群:20名)と、修復の最中に実験者に全く視線を向けない子ども(修復-視線群:8名)、修復行動を全く示さない子ども(修復なし群:8名)に分けて、それぞれの行動特徴について検討することが目的である。したがって、子どもが上記のどの修復行動のパターンを示すかを特定して群分けし、信頼性の高い行動変数について3群間の差異の検討を試みた(Table 1とTable 2参照)。なお当然ながら、場面(d)における修復行動の潜時や持続時間および調査者への注視の潜時や頻度に対する群間の差異は検討しなかった。

また、特に潜時という変数においてはその数値に対数変換を施すべきという慣例もあるが、本来は、複数条件のデータの平均値と標準偏差の間に比例関係がある場合に対数変換が適用される(石田,1990)のが統計学的な理に適っている。また、今回の各行動の潜時の度数分布をみると、左に偏った歪度の高い分布を示した行動は少数であり、一様に各行動の潜時に何らかの変数変換を施すのも問題があるだろう。

そこで今回は、潜時変数に特に変数変換を施すことはなく、各行動変数に一要因分散分析を施した。特に有意な結果について述べると、まず、場面(c)での(9)保育士への注視の潜時において群の主効果が有意であり( $F(2,31)=4.54, p=.019$ )、Bonferroni法の多重比較により、修復+視線群のほうが修復-視線群に比して有意に短いことが分かった( $MSe=2387.72$ )。また、場面(d)の調査者への潜時において群の主効果が有意であり( $F(2,33)=5.04, p=.012$ )、Bonferroni法の多重比較により、修復+視線群のほうが修復-視線群に比して有意に短いことが明らかになった( $MSe=238.88$ )。

## 考 察

特に有意な結果について触れると、まず、修復+視線群の子どものほうが修復-視線群の子どもに比して、場面(c)でも保育士に視線をより早く向けやすいことが示された。これは、保育士への視線を向けることが保育士に対して援助を求めるためのものか、それとも子ども自身が直面している事態に対する参照視なのか、いずれにしても、場面(d)で調査者に視線を向けながら修復する子どもは視線を向けずに修復する子どもに比べ、一貫して、他者あるいは他者が自分自身やその周辺事態をいかに見ているかに注意を払いやすいことを示唆しているだろう。またさらに場面(d)での調査者への提示行動の潜時において、修復+視線群のほうが修復-視線群より有意に短いことは示されなかったものの、修復+視線群のほうが修復なし群に比して有意に短かった。これは、場面(d)で調査者に視線を向けながら修復する子どもは修復しない子どもに比べて明らかに、自ら直面している事態を他者に見せようとする傾向があることを示唆しているだろう。概して、自らが害を及ぼした他者に注意を向けながら修復するという行動パターンを有する子どもはそうした行動パターンを示さない子どもに比して、他者が自分自身や事態をいかに見るかを意識して隠そうとするというよりも、その他者のためにその害を補償しようとする傾向が強いと考えられた。そして、修復行動の最中に見られる他者への注視は、罪悪感の非言語的表出・行動の指標として修復行動とともに要となるものと思われた。

## 研究 2

### 方 法

**参加者** 研究1の参加者で分析対象となった36名のうち、保護者や保育園から第2回目調査の了承をいただいた子ども17名（男児5名、女児12名）。研究1における第1回目調査ではこの子どもたちの平均年齢は32.2ヶ月、月齢レンジは27から37ヶ月であった。

**調査時期** 2000年7～9月。子どもはそれぞれ、第1回目調査の時点から丸1年±1週間経過して第2回目調査に参加した。

**手続き** 第1回目調査と同様に第2回目調査においても、恥や罪悪感といったネガティブな自己評価的情動を惹起しうるような、調査者の大切な物を自ら壊したと思込ませる2場面を設定した。2場面とは、第1回目調査でも行った、調査者の大切な人形を自ら壊したと思込ませる場面と、調査者が組み立てた積み木の建造物を自ら壊したと思込ませる場面である。参加者である子どもたちはそれぞれ2つの場面に誘導されたが、調査者の大切な人形が壊れる場面においてそもそも男児は人形にあまり興味を示さず、他の玩具で遊ぼうとすることが多々見られ、人形に対する興味・関心において男女でかなり異なっていた。一方、調査者の積み木建造物が壊れる場面に対して男児も女児もその建造物に興味を示し、それに近寄って積み木をさらにのせようとする多々見られた。そこで今回は、調査者の積み木建造物が壊れる場面のみを分析の対象とした。特に、この場面の終了時点にまで至った子ども13名（男児4名、女児9名、平均34.0ヶ月、月齢レンジ31.0～37.0ヶ月）の行動データを分析することになった。

**調査場面** 調査者の組み立てた積み木の建造物を自ら壊したと思込ませる場面は子どもの慣れ親しんだクラスルームで設定され、その流れは、次のとおりである。(a)調査者は積み木で建造物を作ったところで、子どもをクラスルームに呼び込む。(b)調査者は子どもに、“ほら、すごいでしょ”と建造物に指さして言い、さらに“ちょっと用事があるから、この建物はまだ作りかけなんだけど、続きを作ってくれる？”と言い、子どもが“ウン”と頷いたところで部屋を立ち去る（場面進行中、保育士はクラスルームに居り、子どもが見渡せる範囲内で帳簿付け等の保育士の仕事している）。(c)建造物の中にある1つの積み木には細い釣り糸が繋がれており、子どもが建造物の積み木を触ったと同時に、あるいは積み木を建造物にのせたと同時にその糸を引くと、建造物が壊れてしまう。(d)その2分後に、調査者が再び入室して「あっ」と言った直後、壊れた建造物を1分間見つめ続け、それで場面は終了となる。

**倫理的配慮** 特に子どもの心理的ケアという観点で第1回目調査（研究1）と同様に行った。

**行動評定** 今回の目的は主に、崩壊した建造物を調査者に目撃されることによって生じるであろう、恥と罪悪感に関連した行動の、第1回目と第2回目の間での関連を検討することである。したがって、場面(d)のみでの子どもの表出・行動を評定・計測することにし、研究1の行動評定のところで記載した、(1)修復行動、(2)調査者への提示行動、(3)調査者に対する視線回避、(4)調査者に対する身体的回避、(5)調査者への注視、(6)微笑みを、その定義にしたがって評定した。

**行動変数とその信頼性** 研究1と同様に、先であげた(1)から(6)の行動の有無、潜時、頻度、持続時間を計測した。そしてそれらの変数の信頼性を、行動の有無についてはもう一人の評定者（心理学専攻の大学院生）と測定データとの $\kappa$ 係数を算出することで、行動の潜時、頻度、持続時間といった量的変数については評定者間でPearsonの相関係数を算出することで検討した（第2回目調査では参加者が少ないため、参加者全員のデータを使用した）。その結果、行動の有無につ

いては全ての行動で高い信頼性が示された ( $\kappa = .82 \sim 1.00$ )。続いて潜時、頻度、持続時間に関して、修復行動の頻度 ( $r = .47$ )、修復行動の持続時間 ( $r = .69$ )、提示行動の頻度 ( $r = .55$ )、提示行動の持続時間 ( $r = .59$ ) 以外の変数では高い信頼性が得られた ( $r = .76 \sim .90$ )。こうして、高い信頼性の得られた変数を分析の対象とし、それらと研究1の同様の場面でのデータの関連性を検討した。

Table 3 第1回目と第2回目調査の各行動の有無

参加者	2回目 調査時 の月齢	性別	修 復		提 示		視線回避		身体回避		注 視		微 笑 み	
			1回	2回	1回	2回	1回	2回	1回	2回	1回	2回	1回	2回
A	43	女	○	○	×	×	○	×	×	×	○	○	○	○
B	43	女	○	○	○	○	○	○	×	×	○	○	×	×
C	43	男	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	×	
D	45	女	○	○	○	○	×	×	×	×	○	○	○	○
E	45	女	○	○	○	×	×	×	×	○	○	×	×	
F	46	女	○	×	×	×	○	×	×	×	○	○	×	×
G	46	女	×	○	×	×	×	×	×	○	×	×	○	
H	46	男	○	○	○	○	×	×	×	×	○	○	○	○
I	48	女	○	×	○	○	○	×	×	○	○	×	×	
J	48	女	×	○	×	○	○	○	×	×	○	○	×	○
K	48	男	○	○	○	○	×	×	×	×	○	○	○	○
L	49	男	○	○	○	○	×	×	×	×	○	○	×	×
M	49	女	○	○	○	○	×	×	×	×	○	○	○	○

※第1回目と第2回目それぞれの調査場面(d)において、○は行動が一度でもあることを、×は行動が全くないことを示す。

Table 4 回避的行動を示した群と示さなかった群の各行動変数の平均値 (SD)

	修復の 潜時	提示の 潜時	注視の 潜時	注視の 頻度	注視の 持続時間	微笑の 潜時	微笑の 頻度	微笑の 持続時間
回避なし群	19.76 (20.84)	11.57 (21.59)	13.99 (18.46)	2.97 (2.55)	5.15 (3.77)	21.42 (27.04)	1.62 (1.54)	7.19 (8.02)
回避あり群	27.39 (27.33)	37.51 (25.37)	14.87 (22.59)	2.30 (1.64)	3.88 (3.44)	40.29 (30.54)	.19 (.29)	1.23 (1.99)

※上記の潜時と持続時間の単位は秒、頻度は回数である。

## 結 果

**第1回目と2回目調査間の行動の関連性** まず、第1回目と第2回目の子どもそれぞれの行動の有無についてみた (Table 3 参照)。各行動の有無について、第1回目と2回目調査間でどの程度連続しているのかを検討するために、連関係数  $\phi$  を算出した。その結果、提示行動 ( $\phi = .67$ ,  $p < .05$ ) と微笑み ( $\phi = .55$ ,  $p < .05$ ) において正の有意な連関が見られた。

さらに、詳細に連続性を調べるために、第1回目と第2回目ともに信頼性の高かった行動変数について第1回目と第2回目の調査間でのPearsonの相関係数を算出した。ただし、第1回目と第2回目ともに調査者に対する視線回避や身体的回避を示した子どもはかなり少なかったため、それらの行動の潜時、頻度、持続時間については相関係数を算出しなかった。結果、提示行動の潜時 ( $r = .62$ ,  $p < .05$ )、微笑みの頻度 ( $r = .62$ ,  $p < .05$ )、調査者への注視の頻度 ( $r = .75$ ,  $p < .01$ )、調査者への注視の持続時間 ( $r = .57$ ,  $p < .05$ ) において正の有意な相関がみられた。

**Avoider対Amender** 第2回目の調査での3歳後半頃の子どもでも、Barrett et al. (1993) や

久崎（2005）のように恥に関連した回避的行動を示しやすい子どもはそうでない子どもに比して修復行動や提示行動を示しにくいということが見られるのかを検討した。久崎（2005）と同様に、少なくとも調査者への視線回避と身体的回避のいずれか一方でも示した子どもは回避的行動を示したとし、回避的行動を示した子ども（6名）とそうでない子ども（7名）との間で信頼性の高かった行動変数について  $t$  検定で検討した（Table 4 参照）。その結果、微笑みの頻度のみで有意差が見られ、回避的行動を示した子どもはそうでない子どもに比して微笑みの頻度が有意に少なかった（ $t=2.23$ ,  $p<.05$ ）。しかし、Barrett et al.（1993）や久崎（2005）のように、回避的行動を示した子どもとそうでない子どもの間で期待される修復行動や提示行動に関する有意差は見出されなかった。

## 考 察

**恥と罪悪感に関連する行動傾向の個人“間”差の連続性** まず、他者に害を及ぼしたと思い込んだ際の、提示行動の有無や潜時、また微笑みの有無や頻度に正の有意な関連が見られたことから、提示行動や微笑みに関する個人的傾向は1年の間で一般的にみて連続していることが示唆された。また、こうした場面での害を及ぼした他者に対する注視に関わる傾向においても、その個人差は1年の間で発達の連続することは一般的であることが示唆された。しかし、視線回避や身体的回避といった他者回避的な行動要素について2つの調査間で有意な正の関連は見いだされず、そうした行動要素の関わる行動傾向の個人差は一般に1年の間で発達の連続することはないと考えられる。

概してみると、1年間で、他者親和的な行動傾向あるいは罪悪感やテレ（テレの表出は視線回避の直後に微笑みが表れると特定されている：Keltner, 1995）に関わる行動傾向の個人差は比較的連続するのに対して、他者回避的なあるいは恥に関わる行動傾向の個人差は連続しないのかもしれない。

**恥と罪悪感に関連する行動傾向の個人“内”差の連続性** 第2回目調査においては、他者に害を及ぼしたと思い込んだ際に回避的行動を示した子どもはそうでない子どもに比して、修復行動や提示行動を示しにくいという有意な結果は得られなかった。これは、Barrett et al.（1993）や久崎（2005）とは異にする結果であった。今回の第2回目調査における参加者数・調査場面やデータの加工・分析の手続きは第1回目調査の久崎（2005）と同等ではないが、こうした結果から、一般に、2歳半ば頃では恥と罪悪感のいずれかを優位に経験し、それに沿っていずれかの情動に関連した行動傾向を有していたのが、3歳半ば頃には恥と罪悪感のいずれかの行動傾向の優位性は減じていくのかもしれない。

## 統合的議論

### 本研究のまとめ

本研究では第一に、他者の大切な物を自ら壊したと思い込んだときに幼児に見られる修復行動がいかなる動機づけに依拠しているのかについて、修復行動が持続している最中に生じるその他者への注視に着目して検討した。その結果、害を及ぼした他者に対して注視を向けながら修復する子どもは、その他者に自らが直面している事態についてアピールしやすく、またその他者が居

ないときも一貫して他の誰かに注意を向けやすいことが明らかになった。このことから、注視を向けながら修復する行動パターンを示す子どもは自らが引き起こした事態を隠そうという動機づけを有しているというよりは、他者のためにその事態を補償しようという動機づけを有していると考えられる。また、罪悪感の非言語的表出・行動として、修復行動や提示行動だけでなく、その最中に他者に注意を向けているか否かということも重要であると思われた。

第二に、他者の大切な物を自ら壊したと思いだんだときの、恥や罪悪感に関連する行動が1年間で発達的に連続・安定しているのかについて、1年後の調査実施で得られたデータを通じて検討した。その結果、他者親和的な行動要素で罪悪感に関連しうる、提示行動や微笑みの個人間差は1年後でもかなり安定していることが窺えたが、他者回避的で恥に関連しうる、視線回避や身体的回避の個人間差は1年後でも安定しているとは言い難い結果であった。さらに、1年後の調査では、回避的行動を示す子どもは修復・提示行動を示しにくいといった行動パターンは見受けられなかった。このことから、恥や罪悪感に関連した行動が現出し始める時期に見られるような、行動パターンにおける回避的行動と修復・提示行動のいずれかへの優位性は発達とともに減じていくのかもしれない。

### 今後の課題・方向性

本研究は、罪悪感の非言語的表出・行動指標の問題と、発達初期における恥と罪悪感の個人差の連続性・安定性の問題に些かなりとも挑むものであった。しかし、前者の問題に関しては、本研究の参加者よりも上の発達段階にある子どもや成人においても本研究の研究1と一貫した結果が得られるのか、また罪悪感に関連する表出・行動パターンが通文化的なものなのかを今後検討していく必要があるだろう。また、後者の問題については1年間の連続性・安定性のみならず、発達初期から長期縦断的に子どもを追跡調査し、より長期間の連続性・安定性についてさらに検討していく必要があるだろう。そして、恥と罪悪感の個人差の発達の連続性あるいは非連続性を支える生物学的特質、認知発達の要因、社会的な環境要因を特定し、それらがいかなるタイミングで作用し合うのかという発達のメカニズムを解明していく必要があるだろう。

## 引用文献

- 有光興記 (2006). 罪悪感, 羞恥心と共感性の関係. *心理学研究*, 77, 97-104.
- Barrett, K.C. (1995). A functionalist approach to shame and guilt. In J.P. Tangney & K.W. Fischer (Eds.), *Self-conscious emotions: The psychology of shame, guilt, embarrassment, and pride*. New York: Guilford Press. pp. 25-63.
- Barrett, K.C., Zahn-Waxler, C., & Cole, P.M. (1993). Avoiders versus amenders: Implications for the investigation of shame and guilt during toddlerhood? *Cognition and Emotion*, 7, 481-505.
- Bennett, D.S., Sullivan, M.W., & Lewis, M. (2005). Young children's adjustment as a function of maltreatment, shame, and anger. *Child Maltreatment: Journal of the American Professional Society on the Abuse of Children*, 10, 311-323.
- Buss, A.H. (2001). *Psychological dimensions of the self*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Brown, J.D., & Weiner, B. (1984). Affective consequences of ability versus effort ascriptions: Controversies, resolutions, and quandaries. *Journal of Educational Psychology*, 76, 146-158.
- 遠藤利彦 (1996). 喜怒哀楽の起源—情動の進化論・文化論— 岩波書店

- Ferguson, T. J., & Stegge, H. (1995). Emotional states and traits in children: The case of guilt and shame. In J. P. Tangney & K. W. Fischer (Eds.), *Self-conscious emotions: The psychology of shame, guilt, embarrassment, and pride*. New York: Guilford Press. pp.343-367.
- Ferguson, T. J., Stegge, H., Miller, E. R., & Olsen, M. E. (1999). Guilt, shame, and symptoms in children. *Developmental Psychology*, 35, 347-357.
- Haidt, J., & Keltner, D. (1999). Culture and facial expression: Open-ended methods find more expressions and a gradient of recognition. *Cognition and Emotion*, 13, 225-266.
- 久崎孝浩 (2005). 幼児の恥と罪悪感に関連する行動に及ぼす発達の要因の影響 心理学研究, 76, 327-335.
- 久崎孝浩 (2006). 向社会的行動に対する恥と罪悪感の機能 九州ルーテル学院大学紀要VISIO, 35, 1-16.
- Hoffman, M. L. (2000). *Empathy and moral development: Implication for caring and justice*. New York: Cambridge University Press.
- 石田潤 (1990). データを数値で表現する方法 森敏昭・吉田寿夫 (編) 心理学のためのデータ解析テクニカルブック 北大路書房 pp.1-42
- Keltner, D. (1995). Signs of appeasement: Evidence for the distinct displays of embarrassment, amusement, and shame. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 441-454.
- Keltner, D., & Buswell, B. N. (1996). Evidence for the distinctness of embarrassment, shame, and guilt: A study of recalled antecedents and facial expressions of emotion. *Cognition and Emotion*, 10, 155-171.
- Keltner, D., & Buswell, B. N. (1997). Embarrassment: Its distinct form and appeasement functions. *Psychological Bulletin*, 122, 250-270.
- 菊池章夫・有光興記 (2006). 新しい自己意識的感情尺度の開発 パーソナリティ研究, 14, 137-148.
- Lagattuta, K. H., & Thompson, R. A. (2007). The development of self-conscious emotions: Cognitive processes and social influences. In J. L. Tracy, R. W. Robins, & J. P. Tangney (Eds.), *The self-conscious emotions: Theory and research*. New York: Guilford Press. pp.91-113.
- Lewis, M. (2000). Self-conscious emotions: Embarrassment, pride, shame, and guilt. In M. Lewis & J. M. Haviland-Jones (Eds.), *Handbook of emotions (2nd ed.)*. New York: Guilford Press. pp.623-636.
- Lewis, M., Sullivan, M. W., Stanger, C., & Weiss, M. (1989). Self development and self-conscious emotions. *Child Development*, 60, 146-156.
- Lewis, M., Alessandri, S., & Sullivan, M. W. (1992). Differences in shame and pride as a function of children's gender and task difficulty. *Child Development*, 63, 630-638.
- O'Connor, L. E., Berry, J. W., Weiss, J., Bush, M., & Sampson, H. (1997). Interpersonal guilt: The development of a new measure. *Journal of Clinical Psychology*, 53, 73-89.
- Olthof, T., Schouten, A., Kuiper, H., Sttege, H., & Jennekens-Schinkel, A. (2000). Shame and guilt in children: Differential situational antecedents and experiential correlates. *British Journal of Developmental Psychology*, 18, 51-64.
- Robins, R. W., Nofhle, E. E., & Tracy, J. L. (2007). Assessing self-conscious emotions: A review of self-report and nonverbal measures. In J. L. Tracy, R. W. Robins, & J. P. Tangney (Eds.), *The self-conscious emotions: Theory and research*. New York: Guilford Press. pp.443-467.
- Tangney, J. P. (1999). The self-conscious emotions: Shame, guilt, embarrassment, and pride. In T. Dalgleish & M. Power (Eds.), *Handbook of cognition and emotion*. Chichester, UK: Wiley. pp.541-568.
- Tangney, J. P., & Dearing, R. L. (2002). *Shame and guilt*. New York: Guilford Press.
- Tangney, J. P., Miller, R. S., Flicker, L., & Barlow, D. H. (1996). Are shame, guilt and embarrassment distinct emotions? *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 1256-1269.
- Tangney, J. P., Stuewig, J., & Mashek, D. J. (2007a). Moral emotions and moral behavior. *Annual Review of Psychology*, 58, 345-372.
- Tangney, J. P., Stuewig, J., & Mashek, D. J. (2007b). What's moral about the self-conscious emotions? In J. L. Tracy, R. W. Robins, & J. P. Tangney (Eds.), *The self-conscious emotions: Theory and research*. New York: Guilford Press. pp.21-37.
- Tangney, J. P., Wagner, P., & Gramzow, R. (1992). Proneness to shame, proneness to guilt, and psychopathology.

- Journal of Abnormal Psychology*, 101, 469-478.
- Tangney, J.P., Wagner, P.E., Fletcher, C., & Gramzow, R. (1992). Shamed into anger? The relation of shame and guilt to anger and self-reported aggression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 669-675.
- Tracy, J.L., & Robins, R.W. (2004). Show your pride: Evidence for a discrete emotion expression. *Psychological Science*, 15, 194-197.
- Tracy, J.L., & Robins, R.W. (2006). Appraisal antecedents of shame and guilt: Support for a theoretical model. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 32, 1339-13351.
- Tracy, J.L., & Robins, R.W. (2007). The self in self-conscious emotion: A cognitive appraisal approach. In J.L. Tracy, R.W. Robins, & J.P. Tangney (Eds.), *The self-conscious emotions: Theory and research*. New York: Guilford Press. pp.3-20.
- Wallbott, H.G., & Scherer, K.R. (1995). Cultural determinants in experiencing shame and guilt. In J.P. Tangney & K.W. Fischer (Eds.), *Self-conscious emotions: The psychology of shame, guilt, embarrassment, and pride*. New York: Guilford Press. pp.465-487.

## 脚 注

- 1 本論文の一部は、日本発達心理学会第13回大会（2002年）および日本心理学会第67回大会（2003年）にて発表された。
- 2 本論文における調査にご参加・協力いただいた、保育園児とその保護者の皆さま、ならびに調査実施においてご協力・示唆いただいた保育士の先生方に御礼申し上げます。
- 3 ただし、罪悪感が常時適応的なものではないことに注意されたい。例えば、より良いやり方で対応できたかもしれないという後悔の思いに付随して罪悪感を経験したり、他者を喜ばせる上で自分自身の役目を過度に重くみて罪悪感を経験したりする個人は非適応的な思考・行動をとりやすいこと（O'Connor, Beery, Weiss, Bush, & Sampson, 1997）や、ある基準違反に対して特に子ども自身が明確な責任を負う必要がない場面において罪悪感反応を示す子どもは内在化（internalizing）または外在化（externalizing）問題を示しやすいこと（Ferguson, Stegge, Miller, & Olsen, 1999）が明らかになっている。こうした知見は、罪悪感が過去の出来事を度々想起することで慢性的な反応として経験される場合、あるいは、他者の不幸に対して不当に責任を負ったり過剰に関心を寄せたりして生じる場合には、それが非適応的に振舞う可能性を示唆している。
- 4 恥と罪悪感が明確にいつ頃出現するのか、また恥と罪悪感が同時期に出現するのか、についての確たる証左は未だ示されていない。Lewis, Alessandri, & Sullivan (1992) は、3歳児に課される課題の難度が高いときよりも低いときにその課題の失敗に対して恥反応を示すことから、少なくとも3歳までには子どもはネガティブな自己評価に伴って恥を経験している可能性を示唆した。しかし、罪悪感については検討してはならず、これまでにそうした可能性が罪悪感においても示唆されているわけではない。また、恥、テレ、誇りといった情動においては通文化的に認められる非言語的な表出・行動が特定されている（Haidt & Keltner, 1999; Keltner, 1995; Keltner & Buswell, 1997; Tracy & Robins, 2004）ものの、罪悪感においては信頼をもって認められる非言語的表出・行動は見出されていない（Robins, Nofhle, & Tracy, 2007）。こうした非言語的指標の問題も罪悪感の出現時期の問題の一部関わっていると考えられる。
- 5 2歳半ばという幼い段階の子どもでも、恥傾向や罪悪感傾向を発達させ、さらに恥と罪悪感のいずれかを優位に発達させているのだとすれば、そうした個人間差や個人内差はどのようなメカニズムで生じるのであろうか。先行知見を振り返るかぎり、こうした問いについてこれまで、殆ど議論・実証されてはいない。
- 6 恥と罪悪感の発達の連続性の問題を厳密に考えるとき、そこには、恥と罪悪感それぞれの個人間差が発達的に連続しているのかという問題と、恥対罪悪感の個人内差が発達的に連続しているのかという問題が含まれるであろう。先で触れた、Tangneyの発達の連続性に関わる結果報告は、前者の問題に答えようとするものであった。ただ、児童、青年、成人を対象とした多くの研究結果や報告の中で恥傾向と罪悪感傾向の間はかなり高い正の相関が頻回に見受けられる（Ferguson & Stegge, 1995; 有光, 2006; 菊池・有光, 2006; Tangney & Dearing, 2002;

Tangney, Wagner, Fletcher, & Gramzow, 1992) が, Barrett et al. (1993) や久崎 (2006) の結果では恥に関連する行動の傾向の高い子どもはそうでない子どもに比して罪悪感に関連した行動を発現しにくいことが示され, それら行動傾向の間には負の相関が見られ, 発達初期とそれ以後の恥と罪悪感の関係は異なるのである. これは後者の問題に関わるが, 発達初期には恥と罪悪感のいずれかが優位であったのが, 発達とともに徐々に両情動それぞれの傾向は一つの傾向へ収斂することを意味しているかもしれない. しかし, 発達初期の子どもとそれ以後の子どもや成人を対象とした研究の間には, 測定において何を測度とするのかの違い (行動ベースと言語ベース) やどのように測定されるのかの違い (一回の特定状況と複数の多様な状況) が横たわっており, また恥と罪悪感は類似した状況でネガティブな自己評価によって生じるという共通性もあるため, 一概に, 恥対罪悪感の個人内の差異にそうした普遍的な発達過程があると断言することには憚りがある. こうしたことに触れてみても, 恥と罪悪感をはじめとする自己意識的情動の個人差について発達初期以降の仔細な縦断的検討が待たれるところである.